

図書名	受験番号	氏名
新人保育者物語さくら		

この本を読んで、「保育者としてどう働くか」ということが、全体を通して語られていたように感じた。私は、保育者としてこの本の主人公のさくらのように、園児と一緒に成長していけるように働くべきだと考える。

さくらは、初めて保育士という仕事に就いた時、「自分の保育」ということに悩んでいた。しかしそれは、新人の保育士にはまだまだ先のことで、もっと経験をつんでから得られるものだった。さくらはいろんな人と関わって、また園児に助けられながら「自分の保育」は先輩から技を盗むことから始まると知り、自分を磨くことを学んでいく。私も部活動の部長をしていた時、どのように自分らしく活動できるか悩んでいた。この本に書かれていたように、他の人から技を盗み、そこに自分のしたいことを取り入れて行くことができたなら良いのではなかったのかと考える。

またこの本に出てくる言葉に、「保育には正解はない」という言葉がある。さまざまな性格を持って生まれてくる子どもたちに、どう向き合うかなど、本当にどれが正解なのかは分からない。さくらは、先輩保育士のしぐさや子どもたちの表情を見て、「この子の笑顔が正解だ」と考える。少し問題行動の多い子供とも、向き合ってその子の気持ちに寄り添い、正解を探していく姿が素晴らしかった。私も人と関わっていくことに、何が正解か分からない。しかし、さくらのように働きながら学び、発見して「保育の正解」を見つけていくことができたなら、良いなと感じた。

このように、一人前の保育者になるために、さくらは少しずつ園児と一緒に成長している。本にも書かれていたが、最初からほかの先輩保育者のように仕事は上手にできない。担当する子供が、年中や年長なら、園生活の先輩は子供たちである。だから、素直に園児たちをはじめとする多くの人に助けってもらって、保育士として働く。たとえ、自分の思っているような保育ができなくても、諦めずに少しずつ学んで保育をしていく。そして、子どもたちと一緒に成長することが「保育者として働く」ということだと私は考える。